

記 録

広島大学文書館企画展示  
「金井学校の二人展―平岡敬と大牟田稔―」の記録

菅 真 城

はじめに

広島大学文書館では、平成一七(二〇〇五)年度に三つの企画展示を開催した。オープンキャンパス特別展示「初代学長森戸辰男展」(平成一七年八月四・五日、於広島大学法人本部、同月六日～三十一日、於広島大学文書館)、企画展示「金井学校の二人展―平岡敬と大牟田稔―」(平成一七年九月二日～二二日、於広島大学中央図書館地域交流プラザ)、名誉教授の会特別展示「広島大学の理念」五原則の源流」(平成一七年十一月四日、於広島大学学士会館)がそれである。このうち「初代学長森戸辰男展」と「広島大学の理念」五原則の源流」は、全学的行事に連動したパネル展示である。本稿では、広島大学文書館が独自に企画した「金井学校の二人展―平岡敬と大牟田稔―」の概要について報告することにする。

一、広島大学文書館平和学術文庫について

企画展示「金井学校の二人展―平岡敬と大牟田稔―」に先だって、広島大学文書館平和学術文庫について述べておく。

平成一七年十一月六日、広島大学文書館は森戸辰男記念文庫に続く二つめの特殊文庫「平和学術文庫」を設置した。平和学術文庫は、人類最初の被爆地広島に誕生した広島大学(前身校を含む)関係者が携わった原爆・平和問題に関する資料を収集したものである。

平和学術文庫の中心的な資料群は、広島の地元新聞である中国新聞社の三人の記者のものである。故金井利博(元中国新聞社論説主幹、旧制広島高等学校卒)、平岡敬(前広島市長、元中国放送社長、元中国新聞社編集局長、旧制広島高等学校卒)、故大牟田稔(元広島平和文化センター理事長、元中国新聞社論説主幹、広島大学文学部卒)の三氏の資料である。このうち金井利博関係文書は、平成一七年六月二八日にご遺族の金井満津子氏より寄贈を受けた。平岡敬関係文書は、

平岡氏本人から広島大学原爆放射線医科学研究所（原医研）に寄贈されたものである。平岡氏が新聞記者時代に精力的に取り組んだ朝鮮人被爆者に関する資料であり、原医研と文書館との取り決めにより文書館については文書館で整理・公開することになった。図書については、文書館で整理を行った上で、原医研において公開することになっている。大牟田稔関係文書は、大牟田稔氏のご遺族大牟田聡氏から文書館に寄託されたもので、平成一七年一月から平成一八年一月にかけて大牟田氏宅から文書館に搬入した。平和学術文庫の中で最大の資料群である。その他、故佐久間澄氏（広島大学名誉教授（理学部）、元広島県原水協理事長）の関係文書を平成一七年九月三〇日に広島県原水協から寄贈を受けた。また、故松江澄氏（元中国新聞社論説委員、元広島県原水禁常任理事、旧制広島高等学校卒）の関係文書も平成一七年一月一三日に寄贈を受けた。これらのうち、平岡敬関係文書については整理を完了し、広島大学文書館編『広島大学原爆放射線医科学研究所蔵平岡敬関係文書目録（韓国人・朝鮮人被爆者問題関係史料）』（IPSHU研究報告シリーズ研究報告三四、広島大学平和科学研究センター、平成一七年）として刊行した。その他の文書についても、一般公開に向けて整理作業を進めている。

今回の企画展示は、この平和学術文庫の中核をなす金井利博・平岡敬・大牟田稔の三氏の資料によって、被爆地広島島の戦後について取り上げたものである。

## 二、公開講座「広島から世界の平和について考える」について

平成一七年、広島は被爆六〇周年の年であった。「金井学校の二人展」も被爆六〇周年に関連した企画であったが、「金井学校の二人展」にあわせて、広島大学文書館では平成一七年九月一二～一五日に公開講座「広島から世界の平和について考える」を開催した。その内容については「公開講座案内」（資料2）を掲載しておいたのでそちらを参照していただきたいが、第二日には受講者が「金井学校の二人展」を見学した。この講座の特色に学内外の関連機関と連携したことがあげられる。呉市海事歴史科学館・広島大学原爆放射線医科学研究所・広島大学平和科学研究センターと共催した。こうした取り組みを基礎として、原爆放射線医科学研究所・平和科学研究センターと文書館の三機関で、広島大学平和科学推進連携機構を設立することが構想されている。

公開講座「広島から世界の平和について考える」は、一六名が受講し、そのうち五三名に修了証書を発行した（終了要件は四分の三以上出席）。なお、公開講座「広島から世界の平和について考える」の講義内容については、別途出版する予定である。

## 三、展示の企画

設立二年目と若い組織である広島大学文書館は、その活動を一般に周知してもらう意味も込めて、被爆六〇周年にあたって企画展示を実施することにした。大牟田稔関係文書を受け入れることが決まった当

時から、将来的にはこの資料をもとにして展示を行うことを考えており、資料の受入にあたっては展示を念頭に置いてカメラや鞆などのモノ資料も積極的に受け入れた。

展示は、「一 金井利博」「二 平岡敬」「三 大牟田稔」「四 平和行政」戦後五〇年を回顧しての四部構成とした。展示品はすべて、金井利博関係文書、平岡敬関係文書、大牟田稔関係文書から構成した。展示品の確定およびキャプションの執筆は小池聖一・小宮山道夫・菅真城が分担して行った。「一」は主として小宮山道夫、「二」「三」は主として菅真城、「四」は主として小池聖一が担当した。

展示内容については、パンフレット(資料1)を掲載しているのですが、そちらを参照していただきたい。

広島大学文書館には展示スペースがないため、広島大学中央図書館の地域交流プラザを使用した。展示期間が夏期休業中であったため、期間中土・日曜・祝日は閉館であった。八日間の開催期間中に、一九一名の来場者があった。夏期休暇中ということもあって、学内者の来場が少なかったのが残念である。また、地域交流プラザは使用期間が二週間以内と短いため、十分な展示期間を取ることができなかった。開催にあたっては、金井・平岡・大牟田三氏ゆかりの中国新聞社と中国放送にご後援いただいた。厚く感謝申し上げたい。

## おわりに

展示の総来場者数は多くはなかったが、金井利博氏・大牟田稔氏の

ご遺族や平岡氏ご本人をはじめとして、三氏にゆかりのある関係者の方々には多数来場いただいた。これが縁となつて、金井宏一郎中国放送代表取締役社長(金井利博氏のご子息)には、当館顧問にご就任いただいた。

遺品を前にして涙ぐまれる方を見ると、こちらまで胸が熱くなった。大牟田稔氏のご子息聡氏には、「父の資料は価値があるものとは思っていたが、個人ではどうすることもできなかった。こうして展示してもらつて、資料が生き返った」との嬉しい言葉を頂戴した。

ただし、今回の展示に問題がなかったわけではない。展示までに目録作成が完了していたのは、平岡敬関係文書のみである。金井利博関係文書は目録は作成していなかったが、資料点数が少ないため全体を把握することはできた。しかし、最大の資料群である大牟田稔関係文書については、本格的な整理作業に着手する前であり、文書群全体を把握することができていなかった。大牟田文書については、文書館に搬入する段階の箱詰めまで展示に使えるようなものをピックアップしておくという方法をとった。

こうした展示の方法については、資料を等しく一般公開するというアーカイブズの観点からは、異論もあるであろう。また、大学アーカイブズが卒業生の資料とはいえ、大学と直接関係ない資料を収集することを問題視する見解もあろうかと思う。しかし、設立間もない組織がその存在をアピールする上では、展示という方法はかなり有効である。しかも、被爆六〇周年という年に、原爆・平和に関する取り組みを行うことは、被爆地に誕生した国立大学として必要な事業である。

広島大学は「自由で平和な『二つの大学』」を建学の精神とし、大学の理念に「平和を希求する精神」を掲げている。原爆・平和は広島大学にとってキータームなのであり、それは広島大学のあゆみを後世に伝える責任を負っている広島大学文書館にとってもキータームなのである。国立大学法人化した広島大学が個性化していくためには、広島

中国新聞（二〇〇五年九月二〇日）で報じられた記事（中国新聞社提供）

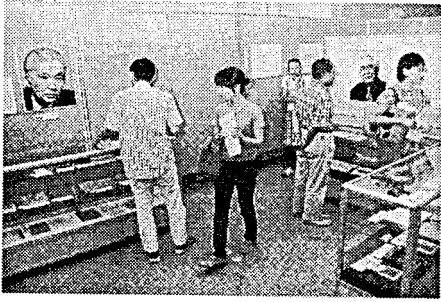
広島市の広島大中国新聞で、原爆・平和報道に積極的にかかわった中国新聞の先陣記者三人の足跡をたどる企画展が開かれてい

る。金井学校の二人展—平岡敬と大牟田稔—。この企画展は、大牟田稔と平岡敬とが、約八十点の資料を所蔵した

「金井学校の二人展」に思う 特別編集委員 田城 明

一九二七年、元編纂員、元取材主任の平岡敬と大牟田稔とが、約八十点の資料を所蔵した「金井学校の二人展」に思う

「金井学校の二人展」を見る市民ら。展示のポスターには左側が大牟田氏、右側が平岡氏



# ヒロシマ問う志を継承

一九二七年、元編纂員、元取材主任の平岡敬と大牟田稔とが、約八十点の資料を所蔵した「金井学校の二人展」に思う。この企画展は、大牟田稔と平岡敬とが、約八十点の資料を所蔵した「金井学校の二人展」に思う。この企画展は、大牟田稔と平岡敬とが、約八十点の資料を所蔵した「金井学校の二人展」に思う。

## 困難増す原爆・平和報道

開されるケースが多い。主要な被爆六十周年報道では、「継承」をテーマにした「ヒロシマを聞く」未来への伝言であり、原爆被害の実態と「平和と和解」のメッセージを核保有国などに伝える「広島世界平和ミッション」である。時代でも、中国新聞の原爆・平和報道は広がり、今こそ未知で言えば、深みをも見せてきたと思

「金井学校の二人展」は、二十日まで。

広島大学文書館 平成17年度公開講座「広島から世界の平和について考える」

(10) **特別講義**

**平岡 敬「私の平和論：ヒロシマをめぐる」**

■講師プロフィール■

平岡 敬(前広島市長)1927年、大阪府生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、中国新聞社入社。1978年、中国新聞社常務取締役編集局長、中国放送代表取締役社長等を歴任。1991年、広島市長に当選。1999年に退任。現在、中国・地域づくり交流会会長等。

4. 受講対象者 一般の方(関心のある方ならどなたでも)
5. 申込方法 郵送(電話での申し込みは受け付けません)  
別紙受講申込書を記入の上、郵送してください。郵送に際しては、80円切手を貼り、返送先を明記した返信用定形封筒を同封してください。
6. 申込先 広島大学文書館 公開講座受付担当 〒739-8524 東広島市鏡山 1-1-1
7. 受付期間 7月20日(水)から8月12日(金)まで(締切日の当日消印有効)  
ただし、応募者多数の場合には、抽選にて定員(120名)を選出いたします。
8. 受講料 無料(大和ミュージアム入館料を含みます。但し、受講に関わる交通費等をご自弁ください)
9. 注意事項 (1)受講者は、講座の募集人員の範囲で認めます。受講を認めた方には受講票をお渡しいたします。  
(2)所定の時間(3回以上)受講した方には、修了証書を交付いたします。  
(3)受講できなかった場合でも、受講申込みにあたっての申込書および返信用封筒等は、お返しできません。
10. 会場 第1回(9月12日) 呉市海事歴史科学館  
〒737-0029 呉市宝町 5-20 TEL 0823-25-3017  
第2回(9月13日) 広島大学中央図書館ライブラリーホール(東広島キャンパス)  
〒739-8512 東広島市鏡山 1-2-2 TEL 082-424-6214  
第3回(9月14日) 広島大学原爆放射線医科学研究所(霞キャンパス)  
〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3 TEL 082-257-5602  
第4回(9月15日) 広島大学医学部広仁会館(霞キャンパス)  
〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3 TEL 082-257-5098
11. その他 この講座の内容等につきましては、下記連絡先までお問い合わせください。  
(土・日・祝日を除く、9時から17時まで受け付けております)

広島大学文書館

TEL 082-424-6050 FAX 082-424-6049

e-mail : [bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp](mailto:bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp)

URL : <http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/>

■講師プロフィール■

小池聖一(広島大学文書館長、広島大学総合科学部 助教授)1960年、大阪府生まれ。中央大学大学院修了後、外務省日本外交文書編纂担当官を経て現職。専門は日本政治・外交史。

(5) **見学** 特別展示「金井学校の二人～平岡敬と大牟田稔～」

第3回 原爆被害の真実 [於 広島大学原爆放射線医科学研究所(霞キャンパス)]

(6) **講義** 「原爆被害の医学的真相 ～放射線の人体影響と今後の治療展望～」

広島原爆による急性期の死亡者数は12万人以上と推定され、被爆後60年を経た現在も被爆者の方は放射線の後障害に苦しんでいる。最近の生命医学の進歩により放射線の人体影響が徐々に解りつつある。放射線はゲノム(全遺伝情報)にキズを付けこれが何らかの原因となって癌などの疾患が発症する。従って、その発症機構が解れば新しい治療法も開発できる時代となった。本講義では、原爆放射線が人体に与えた被害を医学的に概説すると共に最近の研究の進歩により放射線の人体影響がどの様に解明され、その成果がどの様な治療に生かすことが出来るかについても述べる。

■講師プロフィール■

神谷研二(広島大学原爆放射線医科学研究所 分子発がん制御研究分野 教授)1950年、岡山県生まれ。広島大学医学部を卒業後、臨床研修を経て大学院で癌研究を開始。米国ウィスコンシン大学留学後、原爆放射能医学研究所(原医研)助手、1996年より現職。2001-2005年原医研所長を務める。専門は、分子腫瘍学、放射線生物学。

(7) **講義** 「被曝のひろがり～カザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場近郊の核被害～」

カザフスタン共和国には米ソ冷戦構造の負の遺産とも言えるセミパラチンスク核実験場がある。そこでは、1949年から40年間、大気中での111回の核実験を含む合計456回の核実験が行われてきた。この核実験は多くの被害をもたらし、今日でも一説によれば100万人を越える被害者がいるとされる。

我々の研究チームは、核実験場近郊の被曝者を対象に自由記述の証言を含むアンケート調査を2002年から開始した。本講義では、これまで収集したアンケートと被曝証言の分析・考察を通し、セミパラチンスク核実験場で行われた核実験の被害の一端を提示したい。

■講師プロフィール■

川野徳幸(広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター 助手)1966年、鹿児島県生まれ。米国ドーン大学、広島大学大学院を卒業・修了後、リサーチアシスタント等を経て、2001年より現職。専門は平和学、特に原爆・被ばく被害の人文社会学的研究。

(8) **見学** 広島大学原爆放射線医科学研究所蔵原爆関連資料・試料

第4回 平和構築 [於 広島大学医学部広仁会館(霞キャンパス)]

(9) **講義** 「国際平和構築へ」

「広島」は世界的に知られている都市だが、世界が「広島」について向ける眼差しは複雑である。原爆体験を通じた強い平和への願いが、どのように現在の世界が抱える問題につながってくるのかが、必ずしも明らかではないからである。したがって広島の人々の平和への祈りを世界に伝えていくためには、原爆体験の継承、核兵器廃絶に向けた取組みとあわせて、地域紛争などの世界の多くの問題について、ともに悩み、行動していく態度が必要となる。

だがそれにしても「広島」は、現代世界の諸問題の解決に、どう役立つのだろうか。本講義では、現代紛争問題および国際平和構築活動の現況について説明した後、講師が受講生をまじえて、広島を持つ意味について一緒に考えていく。

■講師プロフィール■

篠田英朗(広島大学平和科学研究センター 助教授)1968年、神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修士課程、ロンドン大学 London School of Economics and Political Science 博士課程修了後、広島大学平和科学研究センター助手を経て、現職。専門は国際関係学、平和構築論。

広島大学文書館 平成17年度公開講座「広島から世界の平和について考える」

平和希求の理念をより明確に示すことになる本講座を立ち上げました。

本講座は、平和研究の第一線で活躍されている本学研究者および呉市海事歴史科学館の戸高一成館長という充実した講師陣のもとで行います。そして、最終日には、前広島市長平岡敬氏に特別講義を行っていただきます。さらに、本講座では講義のみでなく、講義の内容に関わる展示の見学を実施することで、平和についての認識をより深めていただきたいと考えております。第1日の呉市海事歴史科学館の見学に始まり、第2日の広島大学東広島キャンパスでは、特別展示「金井学校の二人展～平岡敬と大牟田稔～」(広島大学文書館主催、広島大学図書館共催)を見学します。また、第3日には、原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター主催のもと、普段見ることが出来ない同研究所所蔵の資料展示が行われます。

このような、講義と見学とを通じて、戦争とは、平和とはなにか、戦後と被爆からの60年は、そして現在とこれからの平和は、と思いをめぐらせ、受講者ご自身の平和に対する思索の翼を広げていただければと考えています。

### 3. 学習課題と講師

#### 第1回 戦争と技術、戦艦大和の最後 [於 呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)]

##### (1) 講義「戦争と技術、戦艦大和の最後」

維新後の日本が、西欧から最も積極的に導入したものは産業技術、中でも軍事に関わる技術であった。日清、日露の戦役を最新兵器の導入で、辛うじて勝利した日本は、兵器と言うハードウェアに偏った一種の技術信仰に陥っていった。国防戦略の部分として存在すべき軍備が、本来の目的である国家の要望とずれて行った経緯を、戦艦大和に見ることができる。

##### ■講師プロフィール■

戸高一成(呉市海事歴史科学館館長)1948年、宮崎県生まれ。多摩美術大学卒業後、財団法人史料調査会主任司書、同財団理事、昭和館図書情報部長を経て、現職。専門は日本海軍史・書誌学。

##### (2) 見学 呉市海事歴史科学館展示室

#### 第2回 原爆投下の意義と復興 [於 広島大学中央図書館ライブラリーホール(東広島キャンパス)]

##### (3) 講義「原爆投下の歴史的意義」

原爆を投下した側の意図と結果のズレを明らかにすることによって、原爆投下の歴史的意義を考察する。また、戦略爆撃の観点から原爆投下の意味を考え、戦争責任の問題と原爆投下との関連を明らかにする。

原爆による早期戦争終結と人命節約の効果を強調する意見は当初からあり、アメリカでは今なお世論の中で大きな位置を占めている。早期戦争終結と人命節約の効果は全く根拠のないものであるが、それが今なお強い影響力を持つ背景を、日本が戦時中に主導した大量殺戮としての戦略爆撃に対する連合国の当事者の見方を手がかりに明らかにする。

##### ■講師プロフィール■

布川 弘(広島大学総合科学部 助教授)1958年、山形県生まれ。神戸大学大学院単位取得退学後、現職。専門は近代日本社会史。

##### (4) 講義「戦後復興と森戸辰男の平和論」

広島大学初代学長森戸辰男の平和論を軸に、敗戦後の近代都市広島の復興過程といわゆる「ヒロシマ」の平和論を分析する。

森戸辰男は、観念的平和主義の対極に位置し、戦争主義と暴力主義を排する現実的平和主義を提唱した。そして、動的な平和主義に立つものの、「暴力主義者の革命的平和主義ではなく、平和革命の上にたつ平和主義」であるとする。さらに、中立的平和主義とも異なり、「日本が民主的な国際連合の構成員となり、自国の安全が保障されることを希いそうしてそのためには、内外の事情の許すかぎり応分の協力を惜しまない」とするものであった。森戸の平和論は、全面か片面かで論争化していた講和問題に対しても、片面講和を漸進的な解決への一歩として、自らの現実的平和主義の立場を堅持しつつ、日本の国際社会への復帰を位置付けている。

平成 17 年度 広島大学公開講座案内

## 開設講座 広島から世界の平和について考える

主 催 広島大学<sup>ぶんしょかん</sup>文書館  
共 催 呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)  
広島大学原爆放射線医科学研究所  
広島大学平和科学研究センター  
後 援 中国放送 中国新聞社

### 公開講座の開設にあたって

2005年の今年は、戦後60年であるとともに、広島にとっては被爆60年でもあります。世界最初の被爆地である広島は、今日、復興を遂げて人口115万の政令指定都市にまで発展しました。同時に、被爆地・広島は、いまなお、世界および日本における平和のあり方の探究に取り組む中心地でもあります。

国際社会にあつて、平和に対する脅威も多様化しつつある今日、戦争と科学技術、原爆投下とその被害、それから今日に至る広島市の復興・発展という事象は、問題点を多く含みながらも、戦争とはなにか、そして平和とはなにかを問いかけ続けてやみません。それと同時に、復興を遂げた広島の間には、新たに平和を構築するためのヒントも限りなく有しているのではないのでしょうか。

そこで、戦後と被爆60年にあたる今年、夏季の4日間を利用して、特別展示を併設した公開講座を通じて、「広島から世界の平和について考える」を企画しました。

### 1. 講座名、募集人員、期間および会場

講座名	広島から世界の平和について考える
募集人員	120名
期 間	平成17年9月12日(月)～9月15日(木) 13:00～16:30 (4日間連続)
会 場	第1回 呉市海事歴史科学館 (呉市) 第2回 広島大学中央図書館ライブラリーホール (東広島市) 第3回 広島大学原爆放射線医科学研究所 (広島市南区) 第4回 広島大学医学部広仁会館 (広島市南区)

### 2. 講座の概要

本講座は平成16年4月に設置された広島大学文書館が企画・主催するものです。

広島大学は、初代学長森戸辰男による「自由で平和な一つの大学」という建学の精神を引継ぎ、理念として「平和を希求する精神」を制定しています。この一貫した理念に基づき、医療面では原爆放射線医科学研究所が、平和研究では平和科学研究センターが設けられ、これまで様々な実績を積んできました。そして広島大学文書館は、広島および広島大学における平和の固有性を示す歴史資料を収集・整理・保存し、一般に公開しています。このような広島大学において平和研究の役割を有する三つの組織を中心に、呉市海事歴史科学館の協力を得て、また教育室の後援と図書館の協力を受け、戦後60年・被爆60年を記念して、本学の



中国新聞社・中国放送 後援  
 広島大学文書館 企画展示 2005

の三氏による口頭陳述が行われた。席上、広島・長崎両市長は、明確に国際法違反を主張したのであった。本資料は、平岡市長による口頭陳述(証言)の草稿である。

本審議は、国家の自衛権と国際人道法によって保障される個人の生存権をめぐって判事間で厳しい意見の対立が起きたが、結果として勸告的意見ではあったが「核兵器の威嚇・使用は、武力紛争に関する国際法、特に国際人道法に一般的に違反する。」との結論を、1996年に得たのであった。

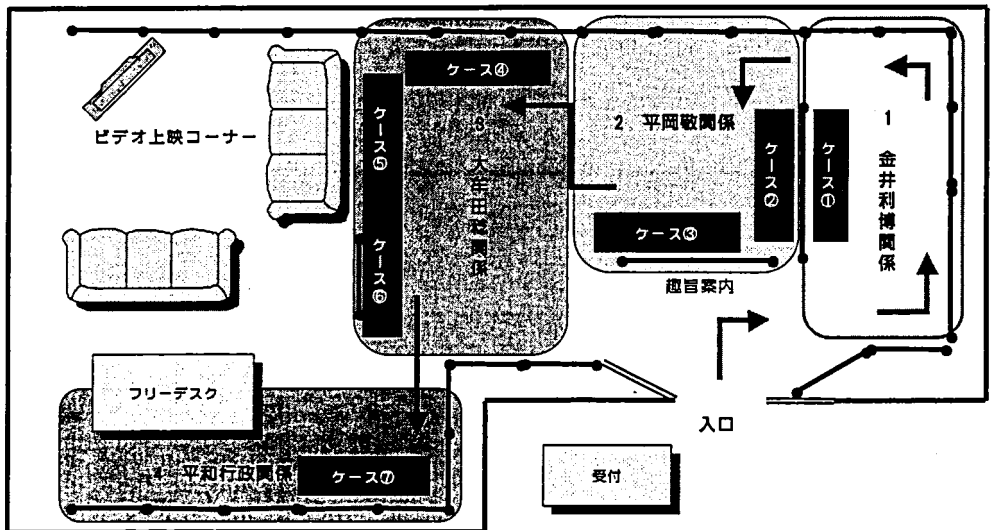
### スミソニアン協会国立航空宇宙博物館特別展問題

1993年、スミソニアン航空宇宙博物館では、戦後50年を記念して原爆投下を見直す特別展を企画し、広島・長崎両市に協力を依頼してきた。本特別展は、原爆投下決定に至る政治的・軍事的事情、広島・長崎の人々が体験した苦しみ、そのうえで、原爆投下の歴史的意義を問うものであった。しかし、対日本戦を正義の戦争とし、原爆投下を正当とする全米退役軍人協会等多くのアメリカ人から非難を浴び、展示台本は修正を重ね、結果として特別展自体、1995年1月、中止に追い込まれたのであった。

被爆資料の貸出にあたって交渉の中心にあったのが、平和文化センター理事長大牟田稔であった。本展示台本は、当初案から後退し、真珠湾攻撃、日本軍の残虐行為等を大幅に取り入れ、報復として原爆投下を正当化する方向性を加味した最終案である。

- (75) スミソニアン協会国立航空宇宙博物館特別展・展示台本 〔大牟田稔関係文書〕
- (76) 第51回日米学生会議基調講演(要旨) 1999年7月 〔大牟田稔関係文書〕
- (77) 「中国新聞」2005年7月24日
- (78) 中国新聞社写真 〔大牟田稔関係文書〕

### 展示会場内略図



「金井学校の二人展」資料目録(第3版)

#### 4. 平和行政～戦後 50 年を回顧して～

##### 平和行政とは

広島市の平和行政とは、広島県市の被爆者援護行政とともに、核兵器廃絶という願いを絶えず世界へ訴え、被爆者と犠牲者への鎮魂慰霊を行う平和宣言を中心に、平岡市政にあつては、平和市長会議と自治体の平和会議、広島平和研究所の設立、そして草の根の市民の交流の三つをもって平和行政の柱として行った。平和行政は、それまで市民局の平和担当推進課が中心であったが、平岡市政では平和文化センターをその中心に据えている。

##### 戦後 50 年の広島

被爆者の悲願であった被爆者援護法(原子爆被爆者に対する援護に関する法律)がまがりなりにも前年(1994年)11月に成立し、「ヒロシマ」は、新たな目標を持つ必要があった。

節目の年となった 1999 年、平岡広島市長は、「ヒロシマ」に被害の視点(アジアを中心とする)を組み込むとともに、平和宣言や国際司法裁判所での証言を通じて核廃絶を世界に訴えた。しかし、スミノニアン原爆展示中止問題における見えざる国家の壁の前に、平岡市政では、市民レベルでの連帯が模索され、成果の一つとしてアメリカン大学で原爆展が開催された。

その意味で、戦後 50 年、広島にとっての被爆 50 年は、「ヒロシマ」の新たな目標として、被爆者問題・平和問題を世界的に広げ、戦争被害者や世界の被爆者との連帯の起点となるはずであった。それから 10 年、広島県および草の根の活動は着実に実を結びつつあるが、「ヒロシマ」にとっては失われた 10 年ではなかったであろうか。

##### 平和宣言

毎年 8 月 6 日、平和記念式典で広島市長が発する宣言。1947(昭和 22)年、平和広場(現在の平和記念公園の北端)で開催された平和祭で、当時の浜井信三市長が読み上げたのが最初である。

平和宣言には、核兵器を廃絶する願いを絶えず世界へ訴え、被爆者と犠牲者の霊を慰める鎮魂慰霊という二つの柱があり、これに影響を与える国際情勢についての認識が添えられる。

平岡市政時、基本的に平和宣言の原稿を市長自ら執筆し、それを平和文化センター理事長大牟田稔が修正した。

本展示は、被爆 50 周年にあたる 1995(平成 7)年 8 月 6 日の平和宣言の原稿である。この時の平和宣言では、3 人の大学教授からも意見を聞く会を開き、関係職員との協議も重ねている。50 年目の節目の年に平岡は、①核兵器が国際法に違反する非人道的兵器であること、②核兵器のない世界をつくるために人類は努力しなければならないこと、③戦争を被害と加害の両面から直視し、アジアの人々に謝ること、④被爆体験・戦争体験を次の世代に継承していかなければならないこと、の四点を宣言したのであった。

- |                               |            |
|-------------------------------|------------|
| (70) 大牟田稔広島平和文化センター理事長辞令      | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (71) 1995 年(被爆 50 周年)平和宣言関係資料 | 〔平岡敬関係文書〕  |
| (72) 平和記念式典パンフレット             | 〔平岡敬関係文書〕  |
| (73) 国際司法裁判所における意見陳述(案)       | 〔平岡敬関係文書〕  |
| (74) 国際司法裁判所証言                | 〔平岡敬関係文書〕  |
- 1994 年 11 月 7 日、オランダ・ハーグ国際司法裁判所での「核兵器使用の国際法上の違法性」をめぐる審議において、日本政府代表河村武和と外務審議官、平岡敬広島市長、伊藤一長長崎市長

中国新聞社・中国放送 後援  
広島大学文書館 企画展示 2005

の原爆小頭症の子どもと親が集まり、「きのこ会」が結成された。会の名称は、原子爆弾のきのこ雲のもとで生まれた子どもというところからとった。以後秋信、文沢、大牟田の三人はきのこ会の事務局となり、親たちに代わってマスコミなどへの対応も行った。

会の願いは、①この子たちの障害が原爆の影響によるものであることの証明、②この子たちへの終生の補償、③このような子が二度と産まれないよう核兵器の廃絶と世界平和、の三つに集約された。きのこ会は、いずれの政党・団体にも属さず、既存の分裂した原水禁運動とは一線を画した。会では会報の他に、1978年には「原爆が遺した子ら」(溪水社)を刊行した。

- (57) きのこ会印鑑 [大牟田稔関係文書]
- (58) 風早幸治(秋信利彦)「IN UTERO」山代巴編「この世界の片隅で」(岩波書店、1965年)  
原稿・ゲラ・刊本 [大牟田稔関係文書]
- (59) 「胎内被爆児」パンフレット [大牟田稔関係文書]
- (60) 「原爆を告発する一胎児に刻まれた放射線障害」企画書 [大牟田稔関係文書]
- (61) きのこ会趣意書 1965年7月 [大牟田稔関係文書]
- (62) 内閣総理大臣宛嘆願書 1971年8月 [大牟田稔関係文書]
- (63) 原爆の体内被爆小頭症患者終身保証をもとめる要望書 1975年7月  
[大牟田稔関係文書]
- (64) きのこ会ポスター [大牟田稔関係文書]
- (65) 「きのこ会会報」 [大牟田稔関係文書]
- (66) 「原爆が残した子ら 胎内被爆小頭症の記録」1977年 [大牟田稔関係文書]
- (67) きのこ会総会大牟田稔メモ 1979年3月 [大牟田稔関係文書]
- (68) きのこ会写真 [大牟田稔関係文書]
- (69) 斉藤とも子「きのこ雲の下から、明日へ」ゆいぼあと、2005年

そして沖縄取材の決意を固めた。

当時の沖縄は日本領とはいえ、渡航には米国側の許可証が必要であった。ヒバクシャ取材では許可が下りないため、大牟田は広島カープの安仁屋宗八投手(現カープ投手コーチ)を生んだ沖縄のスポーツ取材の名目で、1964年8月沖縄に入った。日本のジャーナリストとして初めての沖縄の被爆者取材だった。

沖縄で19人の被爆者を訪ねた取材の成果は、「沖縄の被爆者たち 現地ルポ」の特集記事で、「中国新聞」に1964(昭和39)年8月31日から10回に渡って連載された。これが契機となり、広島島の医師は沖縄の医師と連絡を取り始め、厚生省は専門医を現地に送り込んだ。また、大牟田は「この世界の片隅で」に「沖縄の被爆者たち」を執筆した。

- (52) 沖縄渡航の身分証明書 [大牟田稔関係文書]
- (53) 沖縄取材ノート [大牟田稔関係文書]
- (54) 「沖縄の被爆者たち」「中国新聞」1964年8月31日～9月9日
- (55) 大牟田稔「沖縄の被爆者たち」山代巴編「この世界の片隅で」(岩波書店、1965年)  
原稿・グラ・刊本 [大牟田稔関係文書]

### 『この世界の片隅で』

山代巴編、岩波新書、1965(昭和40)年7月20日発行。

文沢隆一「相生通」、多地映一「福島町」、風早晃治「IN UTERO」、杉原芳夫「病理学者の怒り」、山口勇子「あずにむかって」、小久保均「原爆の子から二十年」、山代巴「ひとつの母子像」、大牟田稔「沖縄の被爆者たち」の8本のルポルタージュを収める。

「広島研究会」の宮為が結実した一冊。同会は、故川手健の友人たちの取り組みがきっかけとなって結成され、川手の方法論を継承した。現地に密着して被爆の問題を掘り起こしており、「原爆に生きて」を受け継いだものである。また、金井利博は本書出版にあたって助言を与えている。

- (56) 沖縄在住原子爆弾被害者名簿 1965年 [大牟田稔関係文書]

### 原爆小頭症

母親の胎内で原爆の放射線を浴びたのが原因で、頭囲が著しく小さく生まれ、成長してからも精神遅滞や内臓奇形、身体障害を伴うという症状。1967(昭和42)年8月30日付で高度小頭症6人が原爆症と認定された。なお原爆小頭症の認定疾病名は「近距離早期体内被爆症候群」。(『広島県大百科事典』より)

### きのこ会

原爆小頭症の子とその親たちの会。1965(昭和40)年、広島で結成。

山代巴編「この世界の片隅で」(岩波新書、1965年)に中国放送の記者秋信利彦は風早晃治のペンネームで原爆小頭症児を取り上げた「IN UTERO」を発表したが、これに関する調査がきっかけで誕生した。この著書は、それまで医学上のデータにすぎなかった原爆小頭症の実態を浮かび上がらせたが、著者たちは原爆小頭症に対する責任を背負うことになった。秋信利彦、文沢隆一、そして大牟田稔が小頭症児や親たちをサポートした。1965年6月27日、広島県婦人会館に六人

中国新聞社・中国放送 後援  
広島大学文書館 企画展示 2005

り(1953年)の編纂にも関与した。1955年、広島大学を卒業。  
1960年春、上京。29歳の若さで自死をとげた。

- |                        |            |
|------------------------|------------|
| (44) 川手健肖像写真           | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (45) 川手健日記 1952年       | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (46) 「事務局日誌」原爆被害者の会事務局 | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (47) 「原爆被害者名簿」原爆被害者の会  | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (48) 川手健宛山代巴書簡         | 〔大牟田稔関係文書〕 |
| (49) 「原子雲の下より」編纂ノート    | 〔大牟田稔関係文書〕 |

### 山代 巴 (やましろ ともえ 1912-2004)

1912(明治 45)年、広島県に生まれる。1929(昭和 4)年、東京女子美術専門学校(現、女子美術大学)に入学しプロレタリア美術に触れる。その後、文芸運動にかかわり、中国山地の農村に生きる女性像を描いた代表作『荷車の歌』などを発表。戦後民主主義や、女性サークルを組織して自己表現力を向上できる場をもつなど、女性運動のさきがけとして活躍。被爆者団体の結成や手記集の出版などにも尽力した。

- (50) 原爆被害者の手記編纂委員会編『原爆に生きて』三一書房、1953年

〔大牟田稔関係文書〕

原爆被害者手記編纂委員会(山代巴、隅田義人、山中敏夫、川手健、松野修輔)編、三一書房刊、1953(昭和 28)年6月15日発行。

被爆体験に加え、戦後の生活史も含めてまとめられた手記集。編者の中心である山代巴に方法論を学びつつ、編纂委員が「被害者の家を直接訪問してお願いし、書けない人々のは代筆してもらい、発表の機会に恵まれない人々の、手記を書かれることに重点を」置いた点に特徴がある。27編の手記を収める。被爆者の生活史を、原爆による苦痛だけではなく、社会的被差別から捉えた点で画期的である。原水禁運動が盛んになる以前に、寄るべき組織を持たず一人原爆の後遺症に苦しんでいる被爆者の苦渋に満ちた姿が浮き彫りにされている。

- (51) 川手健「半年の足跡」(『原爆に生きて』280・281頁) コピー

### 原爆被害者の会

原爆被害者の先駆的な団体。1952(昭和 27)年、川手健(当時広島大学学生)と「原爆一号」と呼ばれていた吉川清が話し合い、被爆者組織の結成を呼びかけ、会員を募った。8月10日、広島市猫屋町の知恩会館で会の結成式を行った。参加者は20数名、峠三吉、吉川清ら5人が幹事に就任し、川手健が事務局を担当することになった。

会は多様な運動に取り組んだが、なかでも『原爆に生きて』を刊行した意義は大きい。その後は資金難もあって、被団協活動に吸収されていった。

### 沖縄の被爆者取材

1963年秋、大牟田稔は国会に沖縄の被爆者が陳情に来たことを知る。「沖縄にも被爆者がいる」。しかしそのことに今まで気づけなかった。大牟田の頭には突然「片隅」という言葉が浮かんだ。

### 3. 大牟田 稔

#### 大牟田 稔 (おおむたみのる・1930—2001)

1930(昭和5)年9月1日、宮崎県に生まれる。広島高等師範学校を経て、新制広島大学の第一期生として文学部に入学。1950年、梶山季之らと文芸同人誌「天邪鬼」を創刊。1953年3月、広島大学文学部文学科仏語仏文学専攻卒業。同年1月、中国新聞社に試用社員として入社、4月に正式に中国新聞社員となる。

1963年、東京支社編集部次長。翌年夏、沖縄の被爆者をジャーナリストとしてはじめて取材した。1965年、原爆小頭症患者と親の会「きのこ会」を結成以来、事務局の仕事に35年間に渡って務める。編集局整理部次長、総務局総務部長、人事部長、総務局次長、編集局編集委員、広島県大百科事典刊行委員会事務局局長などを歴任し、1986年論説委員会主幹となる。1992(平成4)年3月、中国新聞社を退社。同年4月、広島平和文化センター理事長に就任した。1999年3月、同理事長を退任。2001年10月7日他界。

広島大学、広島市立大学などの非常勤講師を勤めた。小説やラジオドラマの台本も書き、文学への造詣が深い。新聞社時代のニックネームは「風小僧」。

- (33) 大牟田稔肖像写真
- (34) 広島大学学生証 〔大牟田稔関係文書〕
- (35) 同人誌「天邪鬼」第二巻第一号 1951年 〔大牟田稔関係文書〕
- (36) 記者章 〔大牟田稔関係文書〕
- (37) 中国新聞腕章 〔大牟田稔関係文書〕
- (38) カメラ 〔大牟田稔関係文書〕
- (39) 万年筆 〔大牟田稔関係文書〕
- (40) 中国新聞メモ帳 〔大牟田稔関係文書〕
- (41) かばん 〔大牟田稔関係文書〕
- (42) 中国新聞論説主幹辞令 〔大牟田稔関係文書〕
- (43) 大牟田稔遺稿集「ヒロシマから、ヒロシマへ」2002年 〔大牟田稔関係文書〕

#### 川手 健 (かわてたけし・1931—1960)

広島での被爆者援護運動の先駆者。

1931(昭和6)年広島県生まれ。旧制中学在学中に、学徒動員先の工場で被爆した。広島高等学校理科を経て、1950年広島大学文学部文学科仏文学専攻に編入学。大牟田稔とは同級生で、学生時代起居をともした。1949年の日鋼争議(日本製鋼所広島製作所で展開された県下では戦後最大規模の労働争議)にも積極的に参加した。この年、作家山代巴と知り合う。広島大学在学中の1952年に「原爆被害者の会」を結成、事務局長を務める。編者として刊行した「原爆に生きて」(1953年)のあとがき「半年の足跡」は、平和運動のあるべき姿を示した一文として評価が高い。新日本文学会広島支部の事務局も務め、峠三吉、山代巴らとともに詩集「原子雲の下よ

中国新聞社・中国放送 後援  
広島大学文書館 企画展示 2005

運用してきた国の被爆者行政のあり方を批判するもので、原爆被害に対する被爆者の国家補償要求の正当性を支える有力な根拠となった。

- (25) 孫振斗の原爆後遺症治療を求める要望書 平岡敬著 [平岡敬関係文書]
- (26) 孫振斗の治療と在留を求めるアピールへの協力を求める書簡 平岡敬著 [平岡敬関係文書]
- (27) 孫振斗支援活動の経緯 平岡敬著 [平岡敬関係文書]
- (28) 復権 No.1 原稿 [平岡敬関係文書]
- (29) 訪韓および孫振斗裁判関係取材ノート 平岡敬著 [平岡敬関係文書]
- (30) 平岡敬「偏見と差別 ヒロシマそして被爆朝鮮人」未来社、1972年 [大牟田稔関係文書]
- (31) 平岡敬「無援の海峡 ヒロシマの声、被爆朝鮮人の声」1983年 [大牟田稔関係文書]
- (32) 平岡敬「希望のヒロシマー市長は訴えるー」岩波書店、1996年 [大牟田稔関係文書]

## 2. 平岡 敬

平岡 敬 (ひらおか たかし・1927-)

大阪市に生まれ、旧制広島高等学校、早稲田大学文学部をへて、1968年に中国新聞社に入社。その後、金井氏により学芸部に入り、朝鮮人・韓国人被爆者問題に光をあてた。その後、販売局長、編集局長(1972年)、常務取締役(1978年)をへて、1986年に中国放送代表取締役社長となる。広島商工会議所副会頭、都市計画中央審議会委員等を歴任し、労組から財界までの広い支持を受けて広島市長に、1991年に当選。「創る平和」を実践し、市民参加型の市政を行い、1999年、惜しまれつつ二期で勇退。現在も、記者魂をもって、セミパラチンスク被爆問題、スローライフ・スローフード運動などで活躍している。

### 朝鮮人被爆者

1945(昭和20)年8月、朝鮮民族でありながら“日本人”として被爆した人々がいた。広島では2万5000~2万8000人が被爆し、うち5000~8000人が死亡、長崎では1万1500~1万2000人が被爆し、うち1500~2000人が死亡したと推計されている。生き残った被爆朝鮮人は、被爆者としての苦痛に苦しみに加え、日本においては民族的差別をうけ、故国に帰った人たちは長くその存在を忘れられていた。

1965年日韓条約が締結されると、平岡敬は私費で韓国に渡り、在韓被爆者の実状をルポした。日本のジャーナリストとして、初めてのことであった。

- (20) 平岡敬肖像写真
- (21) 韓国取材ノート [平岡敬関係文書]
- (22) 韓国原爆被害者援護協会設立趣旨文 [平岡敬関係文書]
- (23) 金草煥発平岡敬宛書簡 訪韓時の取材に対する礼状 [平岡敬関係文書]
- (24) 韓国人被爆者写真 [平岡敬関係文書]

### ソンジンドゥ 孫振斗裁判

韓国人被爆者孫振斗が原爆手帳の交付を求めて起こした裁判。孫は高裁で勝訴した。18歳のとき広島市で被爆した孫は、1970年(昭和45)に原爆後遺症の治療のために密入国して逮捕された。福岡刑務所での服役中に病状が悪化したため、福岡県に対して原爆手帳の交付を申請。同県は厚生省の指示でこれを却下した。孫は「原爆医療法の適用を受けるには被爆の事実さえあればよく、密航者だからという理由で申請を却下したのは違法」として、1972年(昭和47)に処分を取り消しを求める行政訴訟を起こした。裁判では原爆医療法の性格が社会保障法であるかどうかという点と、不法入国者が手帳交付を受けることができるかどうかという点が争点となった。福岡地裁の一審判決(1974年)、福岡高裁の二審判決(1975年)ともに原告が勝訴。これを不服とする福岡県は上告したが、最高裁は1978年(昭和53)3月30日、孫の主張を認めて「手帳交付拒否は違法」とする判決を言い渡した。最高裁判決は、被爆者であれば外国人でも「同法の適用を認めて救済をはかることが、同法のもつ国家補償の趣旨にも適合するもの」と判示した。この判決は、それまで原爆二法(医療法と特別措置法)を社会保障制度の一環として位置づけて



中国新聞社・中国放送 後援  
 広島大学文書館 企画展示 2005

1952年に広島高等師範学校の最後の学生(47回)として卒業。上京後は「新思潮」の同人に加わるなど、著作活動に勤しんだ。「週刊明星」「週刊文春」「文藝春秋」など各誌にトップ記事となるスクープを次々と載せ、「トップ屋」の異名を馳せた。1959年に挙式した皇太子(現天皇)の婚約スクープは夙に有名。1963年発表の「李朝残影」では第49回直木賞候補となり流行作家となった。以後、推理小説・ノンフィクション・ポルノ小説など出版社の要望にあわせて幅広い著述を展開。1975年に取材先の香港で急逝。新宿ゴールデン街などでは今なおジャーナリストたちの間で語り続けられる伝説的存在。今年2005年は生誕75年、没後30年にあたる。広島大学文書館所蔵の金井利博関係文書には梶山との私信が多く含まれており、二人の親交の厚さがよく現れている。金井は梶山を中国新聞社に迎えようとした時期もあった。

- (16) 梶山季之弔辞「金井利博氏の御霊前に」 【金井利博関係文書】

大江 健三郎 (おおえ けんざぶろう・1935-)

作家。1935年愛媛県内子町生まれ。1959年、東京大学文学部フランス文学科卒業。東京大学在学中より作家デビュー。1958年の「飼育」で第39回芥川賞を受賞。1994年には、川端康成に次いで日本人で2人目のノーベル文学賞を受賞。「ヒロシマ・ノート」では、被爆者や医師、原爆被害の記録運動を進める人々に面談し、原爆に対し「もっとも広島的に関与」する人々の生き様を紹介。人類にとっての重要な課題としてヒロシマの問題を取り上げた。原爆に関わる著書として、ほかに講演集「核時代の想像力」(新潮社刊、1970年)、重藤文夫との対談録「原爆後の人間」(新潮社刊、1971年)がある。金井利博と初めて出会ったのは1964年の原水爆禁止大会において、その時の話は「ヒロシマ・ノート」や金井にあてた弔辞にも登場する。大江健三郎と金井利博の著作をまとめた「日本の原爆文学 9」(ほるぷ出版、1983年)が出版されている。

- (17) 大江健三郎「ヒロシマ・ノート 1」『世界』1964年10月号、岩波書店【大牟田稔関係文書】

大江が広島を初めて訪れた1960年の夏、彼は中国新聞にその時の感想を寄せた。「僕はもっと早く広島を訪れるべきだったと思う。それは早ければ早いほどよかった。しかし今年になっても決しておそすぎはしなかったのである」と。彼はその時ヒロシマから受けた「予感」を心に刻んで広島を再訪した。1964年10月号から翌年3月号まで6回を重ねた連載記事は「ヒロシマ・ノート」に結実した。

- (18) 大江健三郎「ヒロシマ・ノート」岩波書店、1965年 【大牟田稔関係文書】

大江健三郎が1963年から重ねた広島取材によってまとめたヒロシマに関するルポルタージュ風エッセイ。キューバ危機やソ連核実験の再開など、当時の核問題に対する国際的な背景と、原水爆禁止運動の分裂という国内問題などを契機として執筆された。原爆後遺症への恐怖に苛まれ続ける被爆者たちの悲惨と、決して絶望せず、かといって決して過度の希望をもつことのない「屈伏しない人々」の姿を描いた。広島に生きる人間の威厳に満ちた姿の中に広島思想の体現を感じ取り「もっとも正当的な原爆後の日本人」と評した。それは金井利博のいう「被爆者の同志」となった人々の姿であり、すべての人間がとるべき「正気な人間としての生き様」であった。

- (19) 大江健三郎追悼文「志」のジャーナリストー金井利博氏を悼む 【金井利博関係文書】

- (7) 年賀状(1974年) [金井利博関係文書]  
「26年後の21世紀を見たい」と述べた金井利博は、この年の6月16日に世を去った。それまで歩んだ自らの人生と最近の闘病生活を振り返ることで、「大自然の運行の尊厳さと人生の恩恵を大切にすべきであった」との感慨を記している。年賀はがきの紙幅では書き足りないばかりに2枚組の年賀状を作成し、身近な課題と世界の行く末とを案じつつ、手がけている数々の取り組みに思いを馳せた。「人生肯定者」の心境に至ることのできた満足感を金井は漂わせている。
- (8) 中国新聞社編集局葬次第 [金井利博関係文書]
- (9) 映画「太陽がいっぱい」特別試写会案内状 1960年 [金井利博関係文書]  
広島・リッツ劇場での試写会チケット。この映画の音楽「太陽がいっぱい」は、金井の生前からの希望で中国新聞社編集局葬において会場内に流された。

### 原水爆被災白書運動

日本が原水爆の被災体験をもつ国家として、核兵器の真の恐怖と被害とを世界に訴えるときに、被爆者援護対策の確立を期するために、被爆の被害の実態を国家事業として調査・研究し、被災白書を作成して世界に公表することを求めた運動。1963年の第9回原水禁世界大会がイデオロギーの相違や政治的信念の違いから分裂し、原水爆禁止運動のあり方が根本から問われるなか、1964年の原水爆被災三県連絡会議の席上で金井利博が提唱した。1945年の米軍側原水爆被害調査団が出した「原子爆弾の放射能の影響によって死ぬべき者はすでに死に絶え、もはやその残存放射能による生理的影響は認められない」との誤った声明以降、十年間強いられた原水爆報道の沈黙。そしてその後の報道などを通じて訴え続けた原水爆禁止運動が、政治的・思想的問題に囚われたがために十分に有効なものとなっていなかった現実。それらを見すえながら「原爆は威力として知られたか。人間的悲惨として知られたか」との書き出しで始まる金井の提案は、いまだ知られていない「人間的悲惨さ」を科学的に明らかにし、原水爆被災の実態を見つめ直し世界にそれを伝えようとする呼びかけであった。

- (10) 「中国新聞」昭和36年8月11日「原爆文献を集めよう」
- (11) 原水爆被災白書を推進しよう 1965年 [平岡敬関係文書]
- (12) 「世界」第231号 1965年 [大牟田稔関係文書]  
原水爆被災白書運動を支えた「談和会」(広島を中心とする大学人有志の会)の代表幹事で広島大学教授の今堀誠二が「原水禁と被災白書の運動」として被災白書運動の現況報告を、大江健三郎が後に「ヒロシマ・ノート」のエピローグとして収録されることとなる「広島へのさまざまな旅」を寄稿している。
- (13) 原水爆被災白書を進める市民の会 会議録 第1回～3回 1965年 [平岡敬関係文書]
- (14) 原水爆被災資料広島研究会(仮称)趣意書 1968年 [平岡敬関係文書]
- (15) 原水爆被災資料広島研究会編「原水爆被災資料総目録」第一集～第三集、1969年～1972年 [大牟田稔関係文書]

### 梶山季之(かじやまとしゆき・1930-1975)

作家。旧朝鮮・京城生まれ。終戦後両親の郷里である広島に帰り、広島大学の包括校である広島高等師範学校国語科に入学。在学中の1950(昭25)年には自宅を編集部として有志とともに「売れる同人誌」を目指した「天邪鬼」を創刊。また共著の短編集「貰ちくんねえ」を自費出版。

中国新聞社・中国放送 後援  
広島大学文書館 企画展示 2005

## 展示目録

### 1. 金井利博

#### 金井学校

大江健三郎「ヒロシマ・ノート」に「生真面目な維新の下級武士」になぞられた金井利博氏の「強烈な個性と、原爆への執念に影響された“社員塾生”たちの総称」である。金井の学芸部長時代を中心に形成され、ひとしれず「金井学校」と呼ばれるようになった。この金井学校の優等生が平岡敬氏であり、大牟田稔氏である。他に、森脇幸次、渡辺忠信、永田守男、松浦亮等の中国新聞記者とともに、中国放送の秋信利彦記者や、作家梶山季之等もその一員といえるだろう。

#### 金井利博 (かないとしひろ・1914-1974)

三次市出身、新制広島大学の包括校・旧制広島高等学校をへて九州帝国大学卒業。召集され朝鮮半島で終戦を迎えた。1947年、中国新聞に入社し、広島ペン・クラブの設立等、地域文化の向上をめざした。学芸部長、1957年には論説委員を兼務して、原爆問題に深く関与していった金井は、原爆被災白書運動を主唱し、自ら原爆被災資料広島研究会を組織して、核廃絶への国家責任を問うた。1972年論説主幹となり、構造的暴力の立場から全世界の難民救済を主張したが、若くして病没した。金井氏の素顔は、温厚な紳士であり、また、一つのテーマに没頭する学者肌の人物であった。

#### (1) 金井利博肖像写真

#### (2) 金井利博「鉄のロマンス」私家版、1955年 [金井利博関係文書]

金井が熱中して取り組んだ古代の製鉄史に関するルポルタージュの集大成。一つのテーマに没頭する学者肌を証明した著書。1955年の中国新聞に全12回連載された記事をまとめたもの。出版にあたり、広島大学国史学研究室教授小倉豊文と日本常民文化研究所の宮本常一とが序文をよせている。小倉教授は序文の中で「本書は中国地方製鉄史研究の一般の人々の「啓蒙書」であると共に、学者にとっても「啓蒙書」たる使命を果たしている」と高く評価した。

#### (3) 「鉄のロマンス」の校正原稿と目次ページの原稿メモ [金井利博関係文書]

#### (4) 金井利博「山代巴善「荷車の歌」をめぐる」『芸備地方史研究』第19号別刷 1956年 [大牟田稔関係文書]

#### (5) 金井利博著「核権力」三省堂、1970年 [大牟田稔関係文書]

#### (6) 広島ペン・クラブ会報 第1号 1949年5月31日発行 [金井利博関係文書]

「広島ペン・クラブ発会趣意」には次の4条が掲げられている(原文縮書)。

- 一 本クラブは広島地方で文筆に従事するものを主体とするが、特に広島地方の文化活動に関心または縁故を有する各界各地の文化人をも含む集いである。
- 二 本クラブは「演説」よりも「談話」を好む人々のクラブである。
- 三 本クラブではクラブ各自の人格と識見とが尊敬され、又相互の幸福と平和とが希求される。
- 四 本クラブに関する限り、クラブ員はすべて自由な個人の資格によって行動し、一切その社会的・職業的地位に拘泥しない。

末尾に記載された会員名簿や役員名簿には広島大学包括校の関係者が多数名を連ねていることが分かる。

広島大学文書館 企画展示 2005

後援 中国新聞社・中国放送

原爆と向きあったジャーナリスト  
**金井学校の二人展**  
－平岡敬と大牟田稔－

趣旨

「原爆は威力として知られたか。人間的悲慘として知られたか」と、1964年(昭和39年)の8月5日、中国新聞記者金井利博(後に中国新聞社論説主幹)は問いかけました。金井氏のこの問いは、被爆60年を経過した今も、苦い思いとともに私たちに訴え続けています。

故金井利博氏、作家大江健三郎氏が『ヒロシマ・ノート』で「生真面目な維新の下級武士」になぞられた彼の「強烈な個性と、原爆への執念に影響された“社員塾生”たち」を、人は「金井学校」と呼びました。この中国新聞社・金井学校の優等生とされたのが、後に広島市長となられた平岡敬氏(中国新聞社編集局長をへて、中国放送社長、前広島市長)であり、「創る平和」を提唱された平岡氏とともに広島市の平和行政を二人三脚で担った広島平和文化センター理事長故大牟田稔氏(中国新聞社論説主幹)です。

「人間的悲慘」として原爆の実相を明らかにしようとする金井氏の執念は、「原爆被災白書をつくる運動」となり、平岡氏は原爆症と貧困そして差別に苦吟する在韩国、韓国人被爆者にはじめて光をあてられました。また、大牟田氏は当時、まだ占領下にあった沖縄の被爆者について取材し、胎内被爆者・原爆小頭症患者とその家族の会である「きのこ会」を支えられたのでした。本展示では、これらの事象について取り上げるとともに、「威力」として原爆・核兵器が知られ続ける今だからこそ、原爆被害と正面から向き合った彼等の仕事を風化させることなく、被爆地広島ならではの固有性もった事績として検証、継承する必要性をも問いかけたいと思っております。

最後に、「自由で平和な一つの大学」を建学の精神とする広島大学では、戦後60年を一つの区切りとして広島大学文書館に「平和学術文庫」を創設し、所蔵資料を広く一般に公開するとともに、本学の研究・教育にも活用してまいります。本展示に使用された資料は、その「平和学術文庫」の中核となるものです。この場を借りて広島大学文書館(平岡資料は、原爆放射線医学研究所所蔵、広島大学文書館保管)に、貴重な資料をご寄贈いただいた大牟田聡氏、平岡敬氏、金井満津子氏に、改めて感謝致します。また、ご後援をいただいた中国新聞社および中国放送にも感謝いたします。

今後、広島大学文書館では、一人でも多くの方にご利用いただき、研究・教育に活用できるよう、緒についた本資料群の整理・保存、公開作業に努力してまいります。

2005年9月

広島大学文書館  
館長 小池 聖一